

高さ3cm、幅1cmの小さな像。大非常の犠牲者が身につけていたこのお守りは、約270mの地底から噴き上げられていた。入坑寸前で運よく助かった出口松治さんが爆発直後に拾った。「この像が、わしの身代わりになってくれたかもしれん」と松治さんは常々語っていたという。観音像ともマリア像ともとれる一部がかけたこの像は、娘の出口クニエさんから「方城大非常」著者の織井青吾さんに渡り、現在は田川市石炭歴史博物館に展示されている。



第二章

謎

いつしか、闇のペールに閉ざされてしまった日本最大の炭鉱爆発事故。

いったい何人の尊い命が犠牲になったのか。なぜ大爆発が起きたのか。いまここで2つの謎に迫る。

忘れられたのか。

それとも、忘れようとしたのか。

この町であったことさえ広く知られていない方城大非常。

当時を知る人は口を閉ざしたまま、

この世から去ってしまった。

炭鉱災害史に最も多くの墓標を刻んだ大事故は、

その原因と結果でさえも「謎」に包まれている…。

爆発事故発生後の方城炭鉱の現場。この写真に写っている人々の声は、もはや聞くことはできない。写真 / 毎日新聞社



もうひとつの
その時。



伊方小学校から方城炭鉱へと向かう勅使一行。この日、門司を出発した澤侍従は11時29分に折尾で下車し、遠賀郡役場で昼食、12時54分に金田駅に向けて折尾を出発した。



事故現場の方城炭鉱を視察する三菱の岩崎久彌会長(右から2人目)

最敬礼で迎えた勅使

勅使来村
悲しみの方城に天皇の使者。

大

非常の情報、事故当日に大正天皇の耳に入りました。その2日後、見舞いとして勅使、天皇の使者で天皇の名代にあたる(差遣)の知らせが新聞で伝わります。

このため、三菱合資会社の岩崎久彌会長(男爵)は、大正3年12月18日に新設でにぎわう東京駅から方城炭鉱に向かい、現場で細かい指示を出しました。勅使の来村は12月22日と伝えられ、侍従職の澤宣元男爵が勅使に任命されました。

子どもたちは傘もささず

当時、天皇は「現人神」とされ、神としてあがめられていました。その天皇の名代として勅使がはるばる来村するといふのです。方城村全体が異様な緊張に包まれました。

伝達の式場に講堂があてられた伊方小をはじめ、炭鉱や納屋では大掃除が行われます。道は掃き清められ、伊方小の校舎前には白砂をまき、勅使用の通路には布が敷かれました。

12月21日、勅使の澤侍従は午前8時発の列車で東京駅を出発。翌朝下関に着き、船と汽車を乗り継いで、午後2時13分、金田駅に到着しました。

当日は雨が降っていました。金田駅には人力車20台が、伊田や直方からもかき集められ、郡長や筑豊の各炭鉱長、首長、議員らが出迎えます。伊方川の



右が勅使として来村した澤宣元侍従、左は谷口留五郎福岡県知事。伝達式は伊方尋常小学校の講堂で行われ、校舎2階の1号室が侍従、2号室が知事の控え室としてあてられた。

ほとりから伊方小までの道の両脇に並んだ伊方・弁城の児童生徒およそ千人は、傘もささずに勅使一行を迎え、教師の最敬礼の号令で頭をさげました。午後2時40分過ぎに勅使が伊方小に到着。講堂で御救恤金(天皇からの見舞金)が県知事に渡され、このたびの非常は、お国のために戦って戦死したのと同じである」との内容の聖旨(天皇からの言葉)が伝えられます。

休憩の後、澤侍従は同校を午後4時に出発し、方城炭鉱を40分間ほど視察。午後5時21分発の列車で金田駅へとしました。

このとき、勅使から下賜された御救恤金の2千円や義捐金は分配され、大正4年9月15日に遺族の手に渡されました。伊方小・弁城小の1千31人の児童生徒には、勅使から鉛筆が1本ずつ下賜されたと伝えられています。